Dual blade

Renew

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｕａｌ　ｂｌａｄｅ

【Ｎコード】
Ｎ５２８９Ａ

【作者名】
Ｒｅｎｅｗ

【あらすじ】
意思を持った剣と、自分を知らない孤児の少年の話。ＳＦファンタジー作品です。

第1章・二人の魔術師

Dualblade

～第1章～

っと・・・・今何時だろう？そろそろ授業が始まるころだろうか？

「ねぇ、ティファー！起きて！先生が来るよ！」

そんなことを考えながら学校の机で寝ていると、友達のケイシィーが俺に話しかけてきた。

「ん・・・もうそんな時間か？」

机から顔を離し目を開けると、先生が教卓で授業の準備をしている。

俺は机の中から教科書と筆箱を取り出し、筆箱から鉛筆を取り出す。

「今日の授業は風属性の浮遊術の実演をしてもらいます」

授業で使うと思われる木で出来たブロックを取り出しながら、先生

が授業の説明を行う。

はぁ・・・よりによって苦手な風属性の魔法かよ。

「よし！風属性なら何とかなりそう！」

俺の隣の席に座っているケイシィーが愉快そうにしゃべる。

「お前はいいよな。風属性が得意でさ」

「でも、ティファーは風以外なら何でも出来るでしょ？」

「ん、まあな。でも風属性だけはどうしても適応できないな」

自分で言うのもなんだが、確かに風属性以外なら大抵のことは出来る。中でも、氷属性が得意だ。

俺みたいに様々な属性を扱える奴は珍しい。大体の奴は、ケイシィーみたいに一つの分野に特化していたりする。

俺たちがそんな会話を交わしている間にも、次々とほかのクラスメイトが名前を呼ばれ浮遊術の実演を行っている。

風属性はの魔法は中でも一番適応できる奴と出来ない奴の差が大きく、軽々とこなす奴もいれば、まったく浮かない奴もいる。

「ティファー・シーヴァイズ君」

先生が俺の名前を呼ぶ。次は俺の番のようだ。

「はい」

しょうがないか、不適合属性なんだから。そう思いながら、俺は席を立ち、教卓へと向かう。

教卓の前に着くと、俺はブロックの上に手を伸ばし、目を閉じる。

そして、手の先に神経を集中し、ブロックが浮くイメージを作り出すことに集中する。

――――――――――ゆっくりと目を開けると、ブロックはびくとも動かずに元の位置にあった。

「やっぱダメか・・・」

そして俺はため息をついてから自分の席へと戻った。

「はい、じゃあ次、ケイシィー・レイズ君」

「はーい」

余裕のありそうな声でケイシィーが返答する。

ケイシィーも俺と同じように、ブロックの上に手を伸ばす。しかし、俺とは違い、ケイシィーはその手を軽く上にあげると、

ブロックが勢い良く空中に上がった。ケイシィーが少し手をひねると、ブロックが切り刻まれて空中でバラバラになる。

そして、ケイシィーが先生のほうを向いてニヤッと笑う。

「はぁ・・・ケイシィー君。言われたこと以外のことはしないほうが良いわよ」

先生がケイシィーをみてため息をつく。

ケイシィーが先生の反応を聞いて、不満足げな顔をして自分の席へと戻っていく。

「やりすぎだぜケイシィー。あれじゃ次の奴が実演できないじゃないか」

席に戻ってきたケイシィーを見ながら俺が話しかける。

「力を出し惜しむと、なんかいやな感じがするんだよね。それに僕の次は誰もいないよ?」

複雑な顔をしながらケイシィーが話している。

「ああそうか。お前の次に実演する奴っていなかったな」

「こら!そこ!授業中に私語は話さない!」

あんまり大きな声で笑っていたので、先生に叱られてしまった。

「はーい・・・」

二人同時にしょんぼりした声で謝る。

「はい、じゃあこれで風属性の授業を終わります。起立！」

先生が号令を言うと同時にクラスのみんなが席を立つ。

「礼！」

みんながその号令とともに頭を下げる。軽く下げる奴もいれば、深々と下げる奴もいる。

みんなバラバラだが、礼をしていない奴はいない。

「ふぁー。やっと終わったねー」

先生が教室から出て行くと同時に、背伸びしながら手を上に伸ばして、あくびをしているケイシィーが話しかけてきた。

「あーあ、なんで魔術学校は適応できない属性も勉強させるんだろな？まったく意味が無いと　思うんだが」

俺は不適応な属性の授業を受けるたびに思うことをケイシィーに問いかけてみる。

「うーん、なんでだろ？自分の不適応な属性も理解させるためかな？」

「だとしたら、実演させる必要あるのか？」

「うーん・・・・まあ、どうでもいいんじゃない？」

「確かにそうなんだが、なんか納得いかないんだよな・・・・」

俺はなぜかどうでもいいことを深刻に考えてしまったりすることがよくある。

もともと、理屈っぽい性格だからだろうか？

「でも、ティファーが受ける授業は風以外は意味あるよね？」

深刻な顔をして考えている俺を見て、ケイシィーが話し掛けてきた。

「あはは、違いないな」

もうこんな無意味なことを考えるのはやめとこう。疲れるだけだしな。

そう俺はその疑問を振り払うと、あとはケイシィーとの会話に夢中になり、

いつの間にかその疑問は頭の中から薄れていく。

「それじゃ今日は何する？」

いつも俺たちが寝泊りしている、生徒用の寮に向かいながら、ケイシィーが話しかけてくる。

「そうだな・・・今日は剣術の練習でもしようか？」

「うん！じゃあそうしよう！」

そう言いながら、ケイシィーが笑顔でうなずいた。

「じゃあ早く帰ろうよ！寮まで競争！」

ケイシィーが愉快そうに俺に競争を提案してきた。

「しょうがないな、じゃあ勝負だ！」

そう言ってケイシィーより早く、俺が寮に向かって駆け出す。

「ああっ！ちょっとフライングだって！待ってよティファー！」

それに驚いたケイシィーが俺の後を走って追ってくる。

「あはははは！早く来いよ！」

先を走る俺が後ろを振り向きながらケイシィーに呼びかける。

そして俺たちは競争に無我夢中になりながら、寮に向かって走っていった。

§

あとから走ってきたケイシィーが先に寮の部屋の前で待つ俺にやっ

と追いついた。

「はぁ・・・はぁ・・・フライングは卑怯だって！」

寮までの競争は結局俺が勝った。

まあ、最初のリードもあるけど元々俺のほうが体力あるからな。

それに、寮は校舎内にあるからそんなに遠くない。

「あはは、まあそう怒るなって。休まなくても大丈夫か？」

「うん・・・早く始めよ！」

ケイシィーはだいぶ息が切れているが、それでも早く剣術の練習を早くしたいらしい。

「じゃあ、俺が木刀取って来るよ。先に広場で待ってて」

そういって、俺は二人分の荷物を持ち自分たちのベットの上に置き、木刀を二本そのベットの下から取り出す。

「っと・・・あったあった。じゃあ早く広場に行くか！」

そして、ケイシィーの後を追い広場へと向かった。

§

寮を出て、しばらく校舎内を歩いていくと、
広場でほかの生徒が剣術の訓練を行っているのが見えてきた。
広場の中に入ると周りを見渡して、ケイシィーの姿を探す。
「ティファー！」
俺が見ていなかった方向から、大きな俺を呼ぶ声がした。
後ろを振り向くと、ケイシィーがこちらに向かって走ってくる。
「じゃあ、防具は僕が持ってきてるからさ。これ着て練習始めよう」
ケイシィーが手に持っていたチェーンメイルとプロテクターを地面に置いた。
そして、俺はそれを手に取り装着する。
「じゃあ、始めるか」
両方とも装着したのを確認すると、二人とも木刀を両手で持ち、正面から向き合う。
「やぁ！」

先にケイシィーが切りかかってきた。だが、俺はその攻撃を横にかわし、

ケイシィーの剣は宙を切る。

攻撃をかわした俺は、ケイシィーの脇腹を狙って斬りを加える。

ケイシィーはその攻撃を木刀で受け止め、木刀がぶつかり合う大きな音がする。

何とかケイシィーは攻撃を受け流し、

その反撃だと言わんばかりに、崩れた体勢でケイシィーが斬りつけてくる。

そこに「隙」が出来た。

ケイシィーの斬りを紙一重でしゃがんでかわすと、がら空きの体に素早く突きを加えた。

そこで勝負が決まった。ケイシィーはその攻撃を防ぎきれず、突きを食らって後ろに倒れた。

「勝負あったな」

「痛てて・・・あーもう、また負けたぁ～」

胸を押さえながら、痛そうにしているケイシィーが悔しそうな顔をしている。

「これでも、騎士志望だからな。剣術には自信があるんだよ」

そう、俺は騎士を目指しているんだ。俺を助けてくれた騎士に憧れてな。

俺もあのような人になりたい・・・

孤独だった俺を、頼る人が誰もいなかった俺を助けてくれた騎士に・・・・

＞続＜

第1章・二人の魔術師（後書き）

・あとがき

あとで、ほかの人の作品と改めて見比べると、
セリフが多いこと多いこと・・・・
4：6くらいあるかも。
これからは、なるべく説明を多くしたいと思います。

第2章・世界を知らない孤児

―――――――Ｄｕａｌｂｌａｄｅ．．．．

～第２章～

俺には生まれたときから、親がいない。

何でいないのかすら分からない。

自分の名前も知らない。もしかしたら、名前なんて無いのかもしれない。

ただ生きるために、地面を這いずり回っていた。

人が捨てたものを食べるか、ボロボロの毛布に包まって寝るくらいしかすることが無い生活。

絶望する事すら忘れてしまい、希望の無い生活。

自分はそんな生活しか出来ない人間だとすら思っていた。

自分が住んでいる世界すら知らない。自分の寝床と周りの貧乏街しか知らない。

それが「世界」だと思っていた。俺はそんな人間だった。

今日も貧乏街で毛布に包まっている。体力を消耗しないように。

体は骨が浮き彫りになるくらいまでやせている。

いつもと同じようにずっと空腹に耐えていた。寒さに耐えていた。

だが、希望の無い日々の中、男の一言で俺の人生が変わることになる。

「君の名前は？」

ぼんやりとしか見えないが、俺の前に手が差し伸べられているような気がする。

顔を上げるとそこには男の姿があった。

不意に声をかけられたので驚いた。だが、驚いただけ。

人に話しかけられて名前を聞かれても、別に幸せとは感じられなかった。

むしろ苦痛に思えるくらいだ。

それくらい、人間と関わることが嫌いだ。ましてや、名前を聞かれるなんて、

自分が名前を知らないことを、馬鹿にされているように思えるから最悪だ。

だけど、この人はほかの人とは何か別の感じがした。ほかの人にあった、

刺されるような感じがない気がする。

「・・・知らない・・」

無気力な、小さくか細い声で俺が答える。

普通なら無視するのに、なぜかこの人には答えを返すことが出来た。

「自分の名前を知らないのか？とりあえずついて来なさい。君に「世界」を教えてやろう」

「・・・え？・・・」

男はそういうと、俺を抱えあげると白い生き物らしきに乗せる。

「・・何ナノ？この生き物？・・・」

初めて目にした、この白い色をした鉄の装甲で覆われている物は何なんだろうと思い、

男に尋ねた。

「なんだ、Ｃ／Ｉ（ｃｏｎｄｕｃｔ・ｉｄｅｎｔｉｔｙ）を知らないのか？それに生き物じゃない機械だよ」

男はその生き物のような機械に乗りながらこちらを向いて不思議そうな顔をする。

「また後で教えてやるよ。とりあえず、俺にしっかりつかまっとけよ」

「あ・・うん・・」

俺は男の言うとおり、しっかりと男の腹の辺りに手を回し、しっかりとつかんだ。

――――ｔｒａｎｓｆｅｒ（移行）・・・・・

男がそうつぶやくと、いきなり今まで感じたことの無い早い速度で走り始めた。

「うわっ！」

あまりにその速度が速かったので、驚いて思わず声を上げる。

「とりあえず、これからお前を孤児院に連れて行く」

こちらを見ないまま男がこれから行く場所を告げる。孤児院ってどこだろう？

世界を教えてくれるってどういうこと？どこかで労働をさせられるのだろうか？

「そういえばまだ俺の名前を言ってなかったな。俺はフィン・レイズ。

騎士を仕事にしている」

そんなことを考えていると、男が名前を教えてくれた。

しばらくすると、前が見れなかったくらいきつかった風にもなれて、心地よく感じるようになっていた。

涼しい・・・・・こんなに心地よい風は感じたことは無かった。

いつも路上で感じている風とはまるで違う。

それに・・・・気づけなかったけど、人に抱きつくのも初めてだった。

初めて人のぬくもりを感じた気がする。

・・暖かい・・・・人がこんなに温かい生き物だとは知らなかった・・・・

§

「着いたぞ。あれ？寝てたのか」

いつの間にか、フィンさんに寄り添って眠ってしまっていた。

「あっ・・・・」

気づくと、大きな宿泊施設のような建物の前に着いていた。

「・・・どこなの？・・・」

この殺風景な建物は何なんだろうと思い、フィンさんに尋ねる。

「孤児院だ。君のような親のいない子供が来る場所だ」

乗り物から降りながら、フィンさんが答える。

そんな場所があったんだ。知らなかった・・・・・

「もちろん、無条件でここに泊まってもらう訳じゃないぜ」

「え？」

「言っただろ？チャンスをやるって。君には軍事学校に入ってもらう。

否定すると言うなら屋根の無い生活に戻ってもらう」

「・・・軍事・・・学校？」

軍事って何？その言葉を聴いてまず思った。何かを学ぶ場所なのはかろうじて分かったが。

「・・・・知らないのか？軍事学校を？」

「・・うん・・・・・」

フィンさんを下から見上げながら、コクリとうなずく。

「簡単に言えばこの国を守る仕事に就くための学校だ。剣術や魔法も教えてくれる」

その言葉を聴いて、急に胸が高鳴る。生と死の狭間をさまよっていた生活から、

家に住ませてもらい、そのうえ、仕事に就くことも約束される。

これ以上の幸せは無いというくらい、幸せな気分だった。

「本当にいいんですか？僕みたいな孤児でも、そんな仕事に就けるんですか？」

「もちろん。才能があればな」

それを聴いた瞬間、視界が明るくなったような気がした。

開けたような気がした。今まで無縁だった希望も、見えた気がした。

自分にもまともな生活が出来るんだ。そう思えるだけでも、孤児の俺には十分幸せだった。

「それで？答えは？」

「もちろん、光栄なことです。やらしてください！」

「急に元気になったな。じゃあ、登録しに行くぞ。名前は・・・自分で決めるか？」

「何でも良いですよ。フィンさんが決めてくれると嬉しいです」

孤児院の受付へ向かいながら答える。

「それじゃあ・・・・［ティファー・シーヴァイズ］ってのはどうだ？有名な騎士の名前だ」

「フィンさんがつけてくれた名前なら光栄です」

そうして、7歳にしてやっと名前を付けてもらえた。

産みの親につけてもらった名前じゃなくてもいい・・・

自分の名前があるだけで幸せだから・・・

これが自分の存在の証明になる気がしたから・・・・

そうして、俺の孤児院での生活が始まった。

この孤児院は騎士や魔術師候補の孤児だけが寝泊りする施設だ。

孤児院での生活は、ほとんどの時間が勉強に費やされた。

通常は8年かける基礎の学習内容を3年も早く終わらすのだから、本当に大変なことだ。

別につらくは無かった。家の無い生活のつらさを知っているから苦痛には感じなかったのだ。

むしろ幸せなことに感じるくらいだった。

それに、友達も出来た。「ケイシィー・レイズ」フィンさんの子供だ。

後で知ったがフィンさんの家系は代々軍隊に使えてきた、有名な家系らしい。

もちろん、フィンさんも腕の立つ騎士だ。

騎士の主な仕事は、人材の選別、重要人物の警護、戦争になれば騎兵の役割も果たすことだ。

人材の選び方は、特殊なコンタクトレンズで魔力を持っているか持っていないか

見極めるらしい。要するに、俺は魔力があったから、目をつけられたわけだ。

俺みたいな孤児が魔力を持っている例は、かなり珍しい。

普通は、貧乏な子供でも魔力を持っていれば国の支援で学校へ通える上に、

生活費の援助まで出る。

それでも捨てたって事は、俺の親はそんなに俺が嫌いなのだろうか？

それを思うと、少し気持ちが憂鬱になる。

まあ、今では俺を捨てた親なんか知ったこっちゃ無いって、考えてるけどな。

あと、魔力の無い人間はいくら希望しても、魔術師や騎士にはなれない。

この世界は階級制が厳しく、普通は孤児を雇うことなんて滅多に無いんだが、

騎士や魔法士に限り能力重視らしい。

中でも俺が一番興味をそそられたのが　Ｃ／Ｉ　だ。

「フィンさんが乗っていた、Ｃ／Ｉって何なの？」って聞いたら、

「騎士が使っている高速移動装甲機体のこと。名前の意味は「自らを導くもの」だ」

それに、一般の人にも有名な兵器らしい。

外見がカッコいいし、騎士の職業も有名だからかもしれない。

孤児院で過ごした5年間で、ずいぶん自分のいる世界の知識が増えた。

その知識のほとんどはケイシィーから教えてもらった。（もちろんフィンさんからもだけど）

ケイシィーは俺と同い年で、別の学校に通っていが、

それでも、孤児院とは比較的近かったので、よく遊びに来てくれた。

そんなことを繰り返すうちに、気づけば俺たちは親友の仲にまでなっていた。

そして、１２歳の春。俺たちは同じ軍事学校へ入学することになった。

＞続＜

第2章・世界を知らない孤児（後書き）

・あとがき

今回は前とは大違いで、説明が多いです。
でも、世界観の説明とか足りないかも・・・
意見があったら歓迎します。

第3章・剣との取引

Dualblade・・・・

～第3章～

俺たちが、軍事学校に入学してから2年が過ぎた。魔法、剣術とも上達し、

騎士を目指す俺たち二人は、2年間ずっと剣の腕を競い合っていた。名家の子供と孤児の関係とは思えないほど、

仲が良かった。二人でいるだけでとても幸せだった。自分との身分の差なんて、まったく感じなかった。

そう、15歳の春までは・・・・

３回生（３年生）になると、自分の希望する属性を選ぶことが出来るようになり、

得意な分野に専念することが出来るようになる。だが、それだけ授業内容も複雑になり、勉強量を２回生より増やす生徒が多い。

俺も例外ではない。氷属性は難なくクリアできるが、雷属性や炎属性は勉強しないといい成績は取れない。

勉強といっても、ほとんど魔法術の実演練習が主で、暗記することは呪文くらいしかない。

今日も実演課題をこなすために、広場で練習をしている。もちろん、ケイシィーも一緒に。

「ねぇ？今度の実演まで間に合いそう？」

俺の練習している横で、ケイシィーが座ってこちら見ながら話しかけてきた。

「まぁ何とか。これなら、いけそうかな」

練習の手を休めて、ケイシィーのほうを向いて答える。

「そういえばさ・・・選抜メンバーが選ばれたって話・・・聞いたことある？」

いつもの調子と違う少し控えめな口調で、俺に尋ねる。

「いいや、聞いてないけど？」

「聞いてないの・・・そう・・・・ならいいんだけど・・」

・・・・。あきらかに今日は様子がおかしい。いつもの明るさが消えている。

「何かあったのか？」

そう思った俺は、ケイシィーに何かあったのか尋ねてみた。

「いや・・・なんでもないよ。本当になんでもないから・・・」

「そうか。ならいいけど」

明らかにおかしい。何かあると思ったが、そのときはケイシィーに配慮してあえて聞かなかった。

「教室戻ろ。授業が始まっちゃうよ」

「ああ。そうだな」

そういって、俺たちは教室へと向かった。

§

ケイシィーの様子がおかしくなって5日後。一向に様子が戻る兆しは無い。

さすがに心配だ。今までこんなこと無かったのに。なんだか理由を聞かないと不安になってくるくらいになった。

そこで、俺は思い切って暗くなった理由を聞いてみることにした。

「なぁケイシィー？何かあったんだろ？話してくれよ？」

二人で寝泊りしている寮の部屋でケイシィーに問いかける。

「・・・」

それを聞くとケイシィーは顔をそらしてうつむいた。それでもケイシィーは話してくれない。相当、嫌な事のようだ。

「お願いだよ。俺も心配なんだ。俺たち親友だろ？」

「・・・ねぇ・・僕たち離れ離れになってもずっと一生親友だよね？」

急なケイシィーの質問に俺は少し戸惑った。だが、なぜかすぐに答えを返すことが出来た。

「あ・・当たり前だろ？俺たちは一生親友だって！だからさ・・・・

そんな暗いケイシィー見てたら不安なんだよ・・・」

・・・・・。しばらくの沈黙が続く。俺が何か声をかけようと思ったとき、ケイシィーが先に口を開いた。

「アリガトウ・・・・・不安にさせちゃってごめん・・・・・」

次にケイシィーが口を開いたとき、彼の目からは涙が零れ落ちていた。

・・・・・僕はね・・・・・・・「戦場」に行くんだ・・・・・

ケイシィーが選抜メンバーに選ばれて、3ヶ月・・・・

ずっとケイシィーとメールのやり取りをしている。

＊こんにちはティファー！今日、やっと訓練終わったんだ。やっと

正式に入隊できるんだ。

それでね、第３５騎兵連隊に入隊することになったんだ。あの有名な連隊にだよ！

でもさ、今度の作戦で国外に行くことになったんだ。しばらくは連絡できなくなるけど、心配しないでね！

大丈夫、絶対無事に帰れるからさ！＊

・・・ピッ・・・メールを読み終えると、携帯を閉じる。

・・・・・心配しないで・・・か・・・・

第３５騎兵連隊っていったら、最前線に配備されることになるのか。

・・・いったい、何が大丈夫なんだ？

つい３ヶ月前まで一緒に寝食ともにしてた親友が、前線で戦争に参加しているなんて・・・いまだに信じられない。

まったく、ふざけた話だ。確かに、この国は人員不足で戦況も劣勢だ。

だが、まだ１５歳のティファーまで戦地に赴くことになるなんて・・・・・確かに、覚悟はしていたつもりだった。

ケイシィーといつか別れる覚悟を。同じ学校に通っていても、所詮は身分が違いすぎる。

違う部隊に配属されることは目に見えてる。・・だが・・・・やっぱり寂しいかった。辛かった。不安になった。

・・それに・・・「ケイシィーがどれだけ大切」なのかを実感した・・・・・・・・

なんで、俺には親がいないの？

なんで、俺はケイシィーに対して、何にも出来なかったの？

なんで、俺はケイシィーとは違うの？

なんで、俺はケイシィーと同じ場所に居られないの？

――――――そうか・・・やっと気づいた。・・・・

俺はいくら世界のことを知っていても・・・・・

・・・・・「自分」のことは何も知らないんだな・・・・・・・・・

それから2ヶ月が経った。まだケイシィーからは、まったく連絡が無い。

この二ヶ月、俺は孤独で、不安で、辛くて、悲しくて、

周りが何も見えない気がする日々が続いた。

今日もケイシィーと一緒に話をしていた校舎の影で、メールを待っている。

そんなことをずっと続けている。

「・・何で・・・連絡が無いんだよ・・・・・」

そうつぶやいて、携帯を持ったままうつむく。

”おい、そこのお前。”

――――――え?

「誰だ!?」

誰に耳元でささやかれた?だが、周りを見渡しても誰もいない。

「空耳か?」

”違う、幻聴じゃねえよ。”

なっ！？どこからだ？どこから話しかけてきている？周りには誰もいないはずだ。

”お前、自分のことについて知りたくないか？”

「・・・自分のこと？お前は誰なんだ？どこから話しかけている？」

”そうかまだ名前教えてなかったな。・・・・「二重の剣」がある いふさわしいかもな。あと、信じないと思うがこれはテレパシーの一種だ”

「・・・テレパシー・・・？」

”まあ、そんなことはどっちでもいい。俺がお前に話しかけた理由を伝えないとな。”

「理由？」

”ああ、そうだ。じゃあ、遠まわしに言うのも面倒だから、簡潔に言おう。お前、「自分」のことについて知りたくないか？”

――――！？どういうことだ？

”もちろん、強制ではない。だが、お前が望んでいることなのは良く知ってる。

断る理由は無いと思うがな。”

「・・・・」

”とりあえず、お前のいた貧民街に来い。そこに俺がいるからよ。”

・・俺がいた貧民街か・・・遠くはないな・・・・・・・だが、なぜ貧民街？

”詳しい内容を伝える。こっちの事情で長時間この能力を使えないんだ。時間はいつでもいいからな。”

「いや、まだ聞きたいことが・・・・」

”じゃあな！”

その言葉を残して会話が途絶えた。

「・・・二重の剣って・・・幻聴・・・・・か？」

この現象を不思議に思いながら、自分の寮へと戻っていった。

§

――――――どうしても眠れない・・・・

自分の寮のに入ってベッドに入ったのだが、さっき起こった、あの現象が気になって寝ることが出来なかった。

・・・・貧民街に行ってみようか？そうでなければ幻聴かどうかも分からない。

・・・・・・だいたい、テレパシーなんて出来るわけが無い。これは幻聴だ。幻聴のはず・・・・・・・・・

”お前、自分のことについて知りたくないか？”

――――――知りたいさ。知りたいに決まっている。自分の親のことも、自分の本当の名前も、

自分の生まれた場所も、自分が捨てられた理由も、自分が何でこんな苦しいのかも、

自分の過去のことや、生きている理由、自分がケイシィーと一緒に居ると幸せな理由も、離れて苦しい理由も・・・・・・

「もう一度ケイシィーと逢いたい・・・・・・」

自分のことを知らなかったら、もうケイシィーとは会えないような気がした。

このままだと、もう二度と同じ場所に立つことは出来なくなるような気がした。

そんな気がしたから・・・・とても不安になった。だから、もっと強く自分のことを知りたいと思った。

――――――――気づくと、俺は貧民街へと走り出していた。思考よりも先に足がなぜか動いたのだ。

勝手に外出をすれば処罰されるかもしれない。でも、そんなことはどうでもいい。

自分を知っている奴がこの先に居る。そう考えると、後のことなど考えられなくなった。

「はぁ・・・はぁ・・・・やっと・・・着いた・・・」

だが、そこには誰の姿も無い。

「・・・幻聴・・・だったのか・・・・」

そうだな。やっぱり幻聴だ。・・・・・・・・・やっと自分の事分かると思ったのにな・・・・・・・

そう思い、寮に戻ろうとした。その時、

”思ったより来るのが早かったな。”

――――――――!!またあの時の声だ！やはり幻聴ではないのか？

”幻聴じゃないって前言っただろ？他人を信用しない奴だな。”

なに？思考が読めるのかこいつ？

”ああそうだ、俺はお前の思考が読める。”

しょうがない、これは本当に幻聴ではなさそうだな。認めざる終えない。

その事については、考えても仕方ないとしてだ。「どうして俺をここに呼んだんだ？二重の剣？」

”とりあえず、俺の姿を見てもらったほうがいいと思ったからな。お前の昔使ってた、ぼろい毛布があるだろ？その中身を見てくれないか？”

「ああ、分かった」

まだあったのか、俺の使ってた毛布。あんまり思い出したくない事だがな。

”それは悪かったな。”

そうか、こいつ思考読めるんだったな。

そう思いながら、かがみこんで毛布を広げた。

・・・・そこにあったのは青紫色に光る不気味な剣だった。

「本当に・・・・・剣？」

”言っただろ、俺は二重の剣だ。意思を持った剣だ。”

「魔剣・・・か？」

魔剣とは、簡単に言えば剣使用者の魔力を補助させる機能を持つ剣だ。その能力を剣に与えるには、魔力を剣に定着させるのだが、2属性以上の属性を剣に定着できた例は報告されていない。ましてや、意思を持った剣など聞いたことなど無い。

”ああ、多分そういう部類に入るんだと思うが、そんなのことはどっちでもいい。

問題は、お前が俺の取引に応じるか、応じないかだ。”

「取引か・・・内容は？」

”俺をある研究所に連れてってほしい。”

「・・・何？研究所？」

”ＳＳＩ（ストレンジ・シーク・インクイル）って知ってるか？”

「・・・・ああ・・敵国フィデラティーの軍事研究施設だな・・・・」

”さすが、軍事学校の生徒だな。話が早い。”

「だが、あんな敵地深くにどうやって行けと？そりゃ、いくらなんでも無理な相談だな」

”もちろん、行ける方法はあるさ。”

「唯一、無人なのは‘プラズマ粒子フィールド’で包囲された「第三国」への国境だけだが、

あれに触れたらどんな物質でも破壊されるぞ？」

第三国というのは、もともと魔法や軍事力に優れた国家だった「カルト」という国のことだ。

だが、９年前に謎の消滅事件がおき、国全体が焼け野原になった。

”俺の魔力を使えばプラズマ粒子をコントロールすることが可能だ。”

「じゃあ、その第三国を通ってフィデラティーに行くのか？」

”ああそうだ。それしか方法が無いからな。”

正直、あまり気が進まない。第三国で起きたのは実験による巨大な核融合だという見方がされているからだ。

あくまで推測に過ぎないが、やはり安心して通れる場所とはいえない。

「・・・」

”嫌だと言うならかまわない。”

「・・・・少し考えさしてくれ・・・」

”そんな暇は無いみたいだな・・・”

「何？」

何かの気配を感じ、後ろを振り向く。

「さあ、渡してもらおうか。その剣を」

＞続＜

第3章・剣との取引（後書き）

・あとがき

ふぅ・・・前の章と比べてだいぶ長くなったなぁ・・・
ほかの人と比べるとまだまだ短いですが；；；
やっと剣が出てきましたね。
あと、ＳＳＩとか。すごくでっかい研究所です。
何より大きいのは、ケイシィーとの別れ。
「自分の事を何も知らないんだ」ってセリフ、
少し違和感があるような気がします；；；
それについて感想があったら、大歓迎です＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5289a/

Dual blade

2010年10月17日02時36分発行